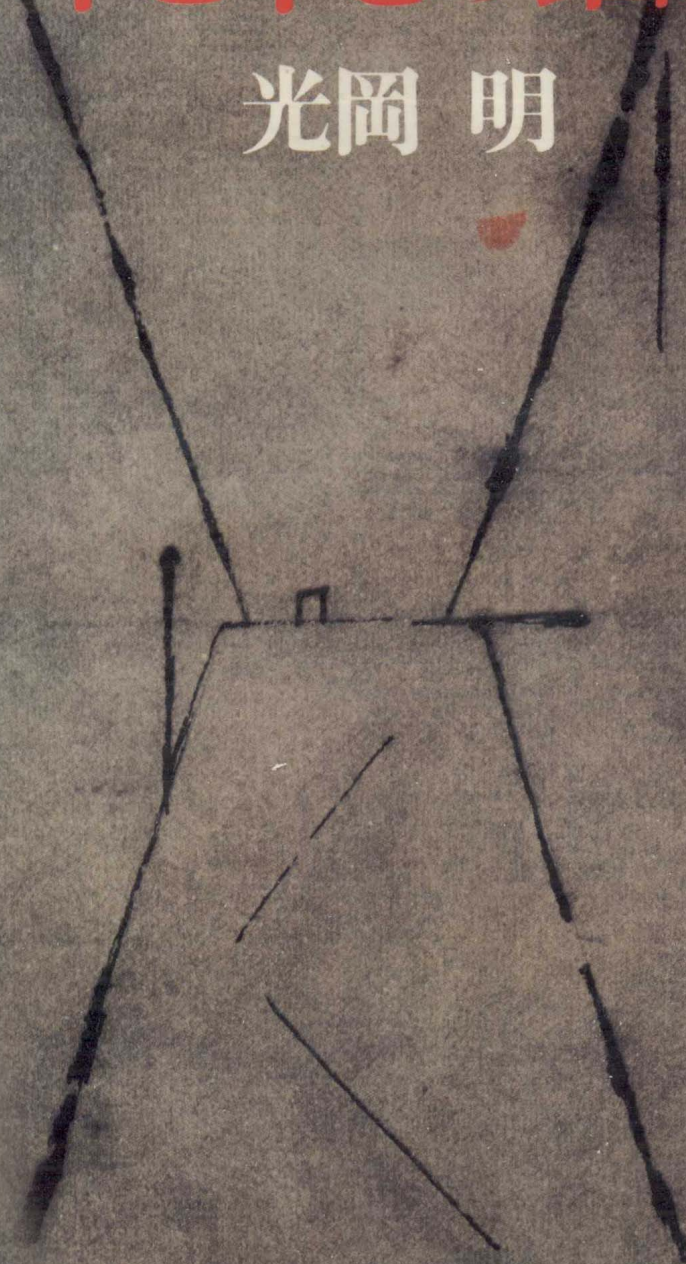


草と草との距離

光岡 明



草と草との距離

光岡 明

光岡明(みつおかあきら)
昭和七年熊本市生れ。
熊本大学法文学部卒。
熊本日日新聞社に入社
し、編集局政経、文化、
整理部、東京支社編集部
長を経て、現在文化、放
送部長。「うづくの園」
「奥義」「朱の塵」「湿舌」
「草と草との距離」で、
第七十五、七十七、七十
八、七十九回芥川賞候補。

草と草との距離

昭和五十三年九月十五日 第一刷

定価 千二百円

著者 光岡明

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三
電話(三三)二六五—二二一

印刷所 大日本印刷

製本所 矢嶋製本

万一、落丁乱丁の場合は

お取替致します

目次

いづくの蟹

奥義

草と草との距離

5

77

151

裝釘
坂本善三

草と草との距離

さくらの
鹿

Y画廊からの話で、主人が故郷にいる時、生計のために描いた似顔絵を集めることになった。その話が英郎さんから出た時、主人は私の顔を見て露骨にいやな顔をしたが、似顔絵の存在を最初にY画廊の耳に入れたのは、なにも私でなく主人だった。

「おーい、なんかくれ」

インクで汚れた上っ張りを着て、画室から出てきた主人が居間に入ってきた。ちょうどY画廊の久彩子さんが来ていて、私とおしゃべりをしていたが、その主人の子どもっぽい口調をまねして、久彩子さんは体を丸めて笑った。

主人はどんなに絵に熱中している時でも、午後三時か四時ごろになると、なにか食べるものを欲しがった。私たち夫婦が東京に出てきてからの目立った変化だった。数こそ食べなかったが、氣に入るものが出てくるまで、口を真一文字に結んで首を横に振りつづけ、まるで自閉症の子どもが質問を拒否しつづけているようだった。

「なんですすよ、どれがいいんですか、早くきめてくださいよ」

私が言っても、主人はその日の機嫌しだいだった。なにか気に入るものが目の前に出るまで、首を横に振りつづけた。桜餅、おはぎ、黒棒、下駄の歯、五家宝、まんじゅう、大福餅、ようかん、せんべい、おかきといった駄菓子類が好きだったが、時に「きのう食べたシュークリームはもうないか」などと言ひ出し、結局、ショート・ケーキ、クッキー、チョコレート類までそろえることになり、そんなもので居間の茶だんすは、いつもいっぱいだった。

「おい、なんかくれ、はいはい、なんにします」

久彩子さんは主人と私の口調をまねしながら、茶だんすの戸をあけた。

「わあ、いつもながらいっぱい」

久彩子さんは茶だんすの中のをのぞき込み、感嘆の声を上げた。

「先生、どれにします」

久彩子さんは楽しそうに、勝手知ったようすで、茶だんすからお菓子を出し入れするのを手伝ってくれた。

久彩子さんが来ていたとは知らなかった主人は、やはり照れ臭かったのだらう、二、三度、首を振っただけで、簡単に「きょうのなにか」をきめた。賽の目に切ったサツマイモを入れたカルカンだった。

「甘党の旦那様って、みんな先生みたいなのかしら」

「私、知らないわよ。旦那様は一人しかいないんだから」

「楽しそうでままごとみたいだって思う時がありますわ」

「私もずーっとそんな気がしてる」

「まあ」

私は主人をだまってみていた。

主人は口の中に入れたものを、一回二回嚙んで、そのまま口を動かさずよく放心した。絵のことを考えているのかは知らない。少なくとも、私のことじゃない。というのは、これも東京に来てから始った癖だったから。私はそんな時には、「ホラ、しびれ、しびれ」と大声を出して、お茶を目の前に突き出し、その放心状態を覚ました。

そんな癖を、久彩子さんは知らない。主人はいなか者に似合わず、とても外づらがいいのだ。

似顔絵の注文をとって歩きながら、自然に身についたものかも知れない。相手をそらさずに、虚心に聞いているような姿勢をとっている。しかし、私は主人が来客と話しているのを聞いていて、どこか根本的に臆病なところがある、と思う時がある。決して世渡りのための会話がへただというのではない。かなり調子を合わせて喋るけれども、一本の糸でつながれた風がいつ糸が切れて空中に飛び去るか、そんな不安でふるえているようなのだ。主人は他人には聞えない天空の声を聞いているようなところがあって、その声が途絶えはしないかと思っており、その不安はとりもなおさず私の不安でもある。だから、私は主人がしびれを起すのが大嫌いで、どうしたって久彩子さんに言わせると賑やかなおばさんになってしまう。

久彩子さんがいたから、主人はもちろんしびれはしなかった。それどころか、一語一語やさしい調子で、主人と同じカルカンを食べていた久彩子さんに、主人は自分がかいた似顔絵のことを

話したのである。生活のためとはいえ、全部集めると二千枚くらいはかいた。粉コンテでふつうの画用紙にかいた粗末なものだが、決していい加減にかいたつもりはない。技術を教えてくれたのが、小学校の絵の先生だったこの人（と私の方を顎でさした）の父親で、ぼくもあとでは村の人たちから先生と呼ばれていた。その二千枚はぼくの海に面した生家のある村を中心に、故郷の半島全体に散らばっている。いまでもそのうちの何百枚か、あるいは少なくとも半分の千枚ぐらいはありはしないか。というのは、描いた対象の大半が死んだおじいさんやおばあさんであり、あるいは戦争で死んだ夫や息子であり、時には先だたれた妻や子どもの肖像だったから。天皇陛下、皇后陛下のご真影のあとに、この人が作ったやはり粗末な額縁に入って飾られているはずだ……そんなことを主人は話した。

久彩子さんはY画廊の当主・福山巖氏の長女である。福山氏はいまは亡いY画廊の持ち主であった吉井勇太郎氏の大番頭だった人で、勇太郎氏の遺児・英郎さんがちゃんと一人前になるまで、Y画廊をあずかったのである。Y画廊は京橋に本店があり、銀座に支店があった。上京してすぐ京橋の本店に呼ばれた主人は、応接間の壁はもとより、ソファの後ろや応接台の下などに何十枚と立て掛けてある絵が、日本や外国の高名な画家の絵であることに気づいて、思わず身を縮めたと言っていた。そのころ学校を出たばかりの英郎さんは、銀座店を使って、部屋全体をまっ白に塗ってその中に椅子が一つ置いてあるような個展を開いてやつたり、直径八十センチぐらい、長さ二メートルぐらいの巨大な炭を部屋のまん中に置いたりするような展覧会を開いたりしていた。その英郎さんに巖氏は絵の売買を根気よく教えた。さし当って主人の絵などが英郎さんの手にか

かった。英郎さんいまは専務で、巖氏もそろそろ完全な後見役へ引き下がろうかという時期にきていた。いずれは英郎さんと久彩子さんは結婚して、Y画廊を経営するのだろう、私たちはそんなふうに思っていた。

久彩子さんはよく遊びに来た。主人の絵の代金を持ってきてくれるという頭の上がない部分もあったけど、育ちのいい明るさが私たち夫婦には珍しく、また心地よく、素直に主人のいなかの話も聞いてくれたから、いつか主人も私も久彩子さんを姪かなにかのように思うようになっていた。

「ねえ先生、いつか私の顔かいてください」

久彩子さんが甘えた。

「うん」

主人はうれしそうに笑った。

「久彩子さん、あのころね、主人は一枚かくと二千円もらってたの」

私が言うと、久彩子さんがあわてて、

「あ、私もお支払いします」

と本気になって、冗談だとわかると、自分から笑い出した。

「ただどあのころって、日本が戦争で敗けて間もなくのころでしょ。二千円というのは高かったのじゃないかしら」

さすが巖氏の娘さんだ、と私はおかしかった。

「ぼくの村には米も野菜もあつたし、海では魚も貝もとれたし、それにヤミ焼酎を作ったり黒砂糖をしぼったりしてたからね、景気はよかつたんだ。村の人は二千円ぐらいは呉れてやるつもりだつたんだろう」

「そうね、私たち、ほとんど現金はいらなかったわ。舟溜りに行くと小魚はただで分けてくれたし、アサリとかハマグリは沖の干潟に行つてとつたし、味噌醬油は私の実家から時々もらつてきてたし、そういえばお金、なにに使つてたんだろう」

久彩子さんは私の言い方がおかしい、とまた体を折り曲げて笑つた。

「ほんとよ、主人は一時期、主人の家から勘当同然だつたけど、ちゃんと畑の隅を借りて居間と台所だけという家、小屋かな、それを私たちで建てちゃつたし、勘当とはいつてもそれは主人の父だけのことでね、母はなんやかんや持つてきてくれたし、主人の弟や妹もシャツやらブラウスやらズボンやら、時には古背広なんかもくれたし……」

「まあ、うらやましい。まるでユートピアの生活みたい」

「ううん、ユートピアというのは少し当らないわよ、なんというか、それより物もらいの乞食の生活といった方がびつたりするわ」

「うん、そうだ」

主人が妙に強く断言したので、久彩子さんはまじまじと主人と私の顔を交互に見た。

「久彩子さん、主人は乞食の生活がいやだから、こんなにたくさん、食べ物を集めるんだと思うわ。だれも呉れなくなるんじゃないかと思つて、きつと不安なのよ。主人の村の中と東京とは

わけが違うから」

「呉れるどころか、逆にぼくからとり上げていってしまうよ」

カルカンを食べ終ったばかりの久彩子さんが、ぱっと顔をまっ赤にした。

「違うよ違うよ、お菓子のことじゃないんだ、そのとり上げるといのは」

主人は両手を上げて体の前で打ちふった。

「ええとなんと言うか、モチーフというかな、いやモチーフじゃない、絵の心とでもいうもの、いや心でもないな、心なんてなくなったりとり上げられたりはしない、才能、ぼくにはとり上げられてしまう才能なんてほどのものはない……」

主人は大あわてだった。

「あのね、絵からなにか大事なものがとり上げられてしまつて、その後、なにもなくなつてしまつてがらんどうになつてしまふ、絵をかくたびに人間がだんだん空っぽになつてしまつて、その癖、どんどん虚飾だけは増える、そのあとを埋めようと思つても、もうみずみずしい回復力はなくなつていて、つまらない気取りだけが残る、そんな感じがする。とり上げられるとかとり上げられないというのは、要するに絵のことなんで、お菓子のことじゃない」

若い女の子に釈明するみじめさで、主人の頭と手はあやつり人形のように、びよこびよこ動いた。お菓子と絵とがあまりに違いすぎて、その当り前のことを一心に説明する滑稽さで、主人は自分ながらいやになったのだらう、ふーっと大きな嘆息をした。途中から思い違いに気づいていた久彩子さんは、むしろすまなさそうなようすで主人の大奮闘を見ていたが、主人の嘆息と同時

に笑い出した。

「似顔絵をかいている時は、その人の年月や、その中で出遭った出来事や、人生観みたいなもので、ぼくの中に流れ込んできたんだが、いまはね、反対なんだ」

似顔絵をかいて暮らすのは、村の中で、奇妙な生活の仕方だった。一枚かいてたしかに二千円もらったが、それは村人にとって、まさに呉れてやるものだったに違いなかった。私たち夫婦二人が食べるものは、村で作られ売られていく米や野菜や果物の流れから、ちよつとこぼれ落ちたものですんだ。余り物でよかった。だれの負担にもならなかったし、私たちは村の中で空気のようになぎれて過ごせた。実際、主人が依頼主のところへ出かけていくバス代を除いて、三日も四日も一銭も金を使わないことがあった。村の人たちにとって、私たち夫婦は農業や漁業のきちんとした生業を持たない乞食だったに違いない。といって、私たちが邪魔にされたことはなかった。むしろ愛想がよかった。それは、主人の父である勇造が村会議員をやり、弟の健児さんが家をついで大きな果樹園をやっていたからであり、私の父も隣村の小学校校長を最後に退職して、母と二人、恩給で悠々と暮らしていたことと、それ以上に、主人と私は絶対に無害だったからだろうと思う。村人たちの心の中に絵などというわけのわからぬものに熱中することへ軽い不審の念があったことは認めるけれども、私たちは、特に私は主人にひたすら寄り添って生きていたし、主人は絵以外になんの関心もなかった。「勇造さんともんでもない息子を持つて世話やのう」というのが村人の一般的意見だったが、それが他人の息子のことであり、その意見の持ち主たちにはいささか心地よい発言だったから、当の私たちにはかえってやさしくはね返ってきた。